



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

「高校生による学会発表会実現への道のり ～移民マップ作成、国内スタディツアー、海外フィールドワーク、 学校設定科目における取組を通して～」

兵庫県立国際高等学校
SGH担当 前川裕史



兵庫県立国際高等学校の紹介

- 平成15年4月1日開校
※前身は県立芦屋南高等学校国際文化コース、国際文化科
- 国際科のみの専門高校 ※県下で唯一
- 教育目標「国際社会に貢献できる人材の育成」と「自ら発信し、多文化・多言語も受容できる人間の育成」
- 1年次(15回生)3学級120人(男子26人、女子94人)
2年次(14回生)3学級123人(男子25人、女子98人)
3年次(13回生)3学級120人(男子23人、女子97人)
- 職員数42人 ※うち教員数は32人

兵庫県立国際高等学校のSGHの取り組み

- 平成27年度文部科学省よりスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定
 - 本校SGHテーマ「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」
 - 目標は「世界の人々が共に生きる場所」として未来の日本の選択肢を提案すること
 - 本校生1年次120人、2年次123人全員で課題研究活動
- ※3年次で論文を作成する者は2年次で学校設定科目「言語技術」を履修
- 3年次は24人が学校設定科目「提案日本の選択」で論文作成

本報告の内容

- 1 「移民マップ」作成の取り組み
- 2 「スタディツアー@移民政策学会」の取り組み
- 3 「カンボジアスタディツアー」の取り組み
- 4 「言語技術」および「提案日本の選択」の取り組み
- 5 「学会発表」における取り組み
- 6 質疑応答およびディスカッション

「移民マップ」作成の目標および活動

目標

- 1 現在、世界でどのような人口の移動が生じているかを地図にすることで可視化し認識を深めること
- 2 地図化を端緒として、なぜ人の移動が生じるかという原因について考察すること

活動

1年次C.C.C.(総合的な学習の時間)の中で、1年次生全員で取り組む

世界移民マップ

「調査対象国」 ※平成27年度

イギリス、リビア、ドミニカ共和国、アメリカ合衆国

ブラジル、インド、ドイツ、カンボジア

フィリピン、オーストラリア、日本、カナダ

調査対象国[カンボジア王国]

移出 図 2005年 単位:1,000人

1年 2組 D班作(2015年)

データ THE GLOBAL FLOW OF PEOPLE より



カンボジア

移出国考察

移出数第5位
フランス(6.3千人)

・第一の要因
かつてはフランス
植民地

・第二の要因
言語的な特徴

・第三の要因
フランスの雇用
状況

調査対象国[カンボジア王国]

移入 図 2005年 単位:1,000人

1年 2組 D班作(2015年)

データ THE GLOBAL FLOW OF PEOPLE より



「移民マップ」発表会

13回生2015.12.15.14回生2016.12.14.



スタディツアー@移民政策学会

目標

SGHの課題研究の一環として、「移民政策学会」に参加し、日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とする

実施日

2015年12月12日 ※中京大学

2016年12月3日 ※神戸女学院大学

2017年5月27,28日 ※成城大学

スタディツアー@移民政策学会2015年冬季大会

[場所]中京大学



2015年12月12日

SGH中間発表での報告2015.12.17.



カンボジアスタディツアーでの取り組み



カンボジアスタディツアーの目的と内容

[目的]

カンボジアでフィールドワークを行い、国を越えて人が移動する現状について調査し、その原因を考察する。

[内容]

カンボジアの性格の異なる2つの農村を訪問し、移出労働経験者を対象に聞き取り調査を実施した。

[調査場所]

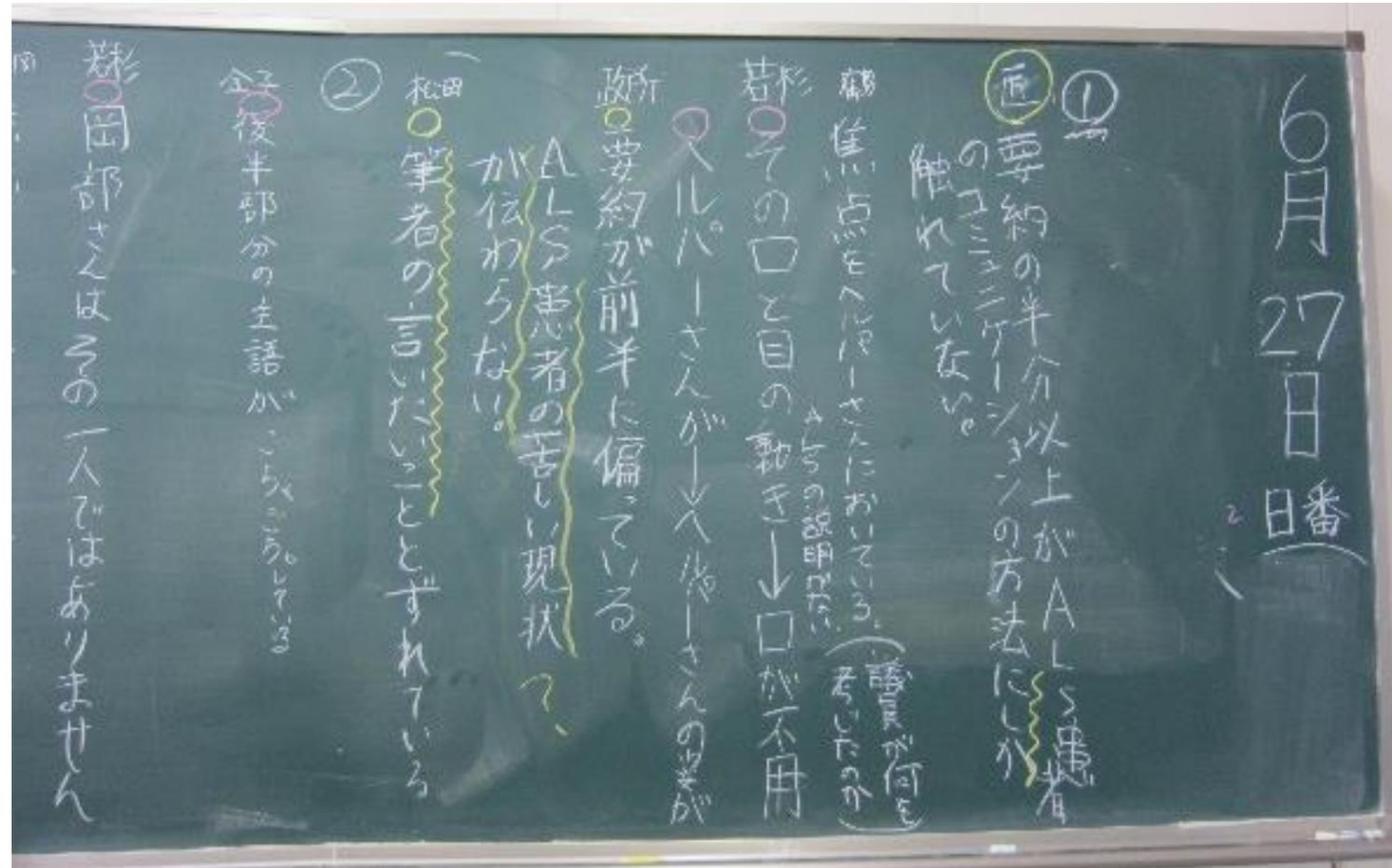
タケオ州サモール村 2016.3.12.

シェムリアップ州プロム村 2016.3.14.

カンボジアスタディツアー報告会2016.5.25.



「言語技術」・「提案日本の選択」での取り組み



学校設定科目「言語技術」の目標

[目標]

言葉を有効に使いこなす技術を身につけ、3年次において論文を作成するための3つの能力をつける。

- (1)物事を論理的・分析的に検討し、適切な判断ができる能力
- (2)問題解決する能力
- (3)考察したことを口頭・記述で自在に表現できる能力

※まとめとして「移民研究」をテーマに3,000字の論文を作成

[対象]

2年次生グローバルリーダーコース ※週に2単位で実施

学校設定科目「提案日本の選択」の目標

[目標]

(1)論文作成を通してグローバル・リーダーに必要な資質である課題発見能力、すなわち、創造的思考力、批判的思考力、論理的思考力の育成を図る。

(2)論文作成を通して、「世界の人々が共に生きる場所を目指して」という日本の未来の選択肢について提案し、広く発信する。

※各自で10,000字の論文を作成(うち1ページは英語の要約)

[対象]

3年次生グローバルリーダーコース ※週に2単位で実施

学会発表での取り組み



学会発表の目的と発表までの経緯

[目標]

学会発表を行うことで、多くの専門家から意見やアドバイスをもらい、今後の課題研究活動を進める契機とする

[経緯]

夏季休業に入る前に、2年次「言語技術」選択者を対象に、移民政策学会冬季大会に論文(2800～3200字)をエントリーしたいものは申し出るように伝えた。

→2人の生徒がエントリーを希望→うち1人が夏季休業中に論文を作成→二学期に担当教員と論文の内容を検討し完成→10月上旬に学会に正式にエントリー→10月中旬に学会から「採用」の通知を受ける

学会発表への準備と発表テーマ

[準備]

- ・プレゼン用パワーポイントの作成
- ・資料の作成
- ・プレゼンの練習

[発表]

自由報告にて「カンボジア移出経験者への調査結果からみる日本の今後の移民政策への考察」をテーマに報告を行った

※報告30分、質疑応答15分

「移民政策学会2017年度年次大会」での活動



本校生による学会報告の内容

本校3年次生がInterest Group B(学会と高等学校の連携部会)において、研究成果を報告した。

[テーマ]「日本とイタリアにおける少子高齢化と移民問題の関係性」

[会場]成城大学

[日程]2017年5月28日 12:00-13:00

[内容]① Interest Group の趣旨説明(学会より) 5分

②本校生による研究報告 20分

③質疑応答 15分

④学会と高等学校の連携の意義について討論 10分

学会報告までの経緯

- 論文を作成した「言語技術」選択者に対し、学会にエントリーするものを募ったところ1名が希望し論文をエントリーした。2017年3月下旬
- 審査の結果、自由報告としては採用しないという連絡を受けた。
- 一方で、学会側から、学会と高等学校との連携には意義を認めるので、Interest Group というインフォーマルな機会を設け、今回の研究報告をすることを提案された。
- エントリーした生徒にこの旨を伝えると、学会で報告をすることを希望したので、学会側に報告することを打診した。

高校生が学会に参加する意義

1 「知る」ことができる

(1)「知識」

(2)「手法」

(3)「空気」

2 人とのつながりを築くことができる

結論

学会への参加は、
生徒が変わる最も大きな契機
となっている

補足

2017年5月28日の移民政策学会2017年度年次大会において、学会と高等学校との連携のあり方について議論された。その結果、今後も学会と高等学校との継続的な連携が図られることになった。下記は、学会から本校へのコメントである。

2017年5月31日

移民政策学会企画委員会

兵庫県立国際高校に対するコメント

SGHの高校生が移民政策学会に参加して研究の最先端の議論に触れることは、今後移民政策分野の研究や実務を志す若者の増加を促すという点で歓迎すべきことである。

(中略) 移民政策学会側としては、学会に対する新しい社会的ニーズを受け止め、そのような社会的ニーズにどう対応するかを考えるよい契機になった。今後は、学会としても、事前学習のための講師役を学会員が積極的に担うなど、日本の移民政策の将来を担う若い世代とともに考える場や機会をどのように設けるとよいか考えていきたい。また、そうした学習を踏まえた上での研究において、若い世代の新たな視点にも大いに期待したい。